



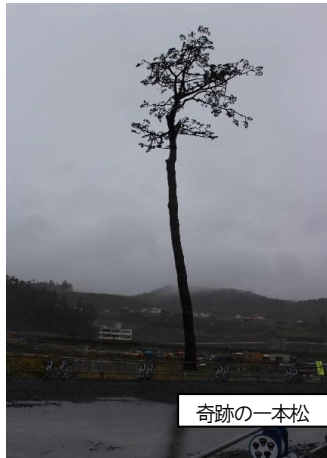
＜AGC 秋の巡行＞

塩竈の測量遺跡と東北復興のいま・見学記

平野 彰

今回の巡行・探索は、2004年10月那須基線、2007年9月都内の測量遺跡(白金高輪から泉岳寺、愛宕山を経て国会議事堂前の日本水準原点まで)と、2014年7月甲州街道沿い地形と几号水準点観察(日本橋三越前から日比谷公園を経て新宿御苑南端まで)、さらに2015年5月霊巖島&油壺験潮場探索、などに続く水準測量遺跡の探索である。10月19日午前10時 近藤L以下今井、渡辺、鎌田、高橋、平野の6名のメンバーが仙台駅東口エスパル仙台東館に集合。駅レンタカーにて6人乗りの車をレンタル。当日は強い雨が止まず、やむなく几号探索等は明日にして、本日は東日本大震災の跡地、復興途上の様子をドライブで見学することにした。運転は以前、震災ボランティアでこの地域を訪れた事のある渡辺が担当。急遽奇跡の一本松まで足を伸ばそうということになり、三陸自動車道を北上、陸前高田を目指す。途中道の駅大谷海岸で昼食、仮設のような施設に完全復興はまだまだ先だと感じる。そしてあの奇跡の一本松のある陸前高田市気仙沼町に午後2時前に到着。

津波伝承館を出て、海岸への道の途中の献花台を経て、防波堤に上ると、雨の中、穏やかな海が広がる。手前の「高田松原津浪復興祈念公園」には新たに植えられ松の苗が並びその傍らに「奇跡の一本松」があった。



奇跡の一本松

塩害で枯れてしまったため、保存処理して残してあるとのこと。伝承館内には、被害にあった消防車や橋桁などが展示してあったが、高さ2メートルほどもある鉄製の橋桁が200m以上も押し流されたとのこと。改めて今回の津波の巨大さとその威力に驚かされた。ここを出ると、防波堤など工事途中の道を南下し、南三陸町志津川の木の香も残る木造建屋が並ぶ「さんさん商店街」に立ち寄り、次いで大川小学校跡へと向かった。

雄大な北上川沿いに新北上大橋を渡ると直ぐ左側に、旧大川小学校がある。薄暗くなった中、廃墟と化した校舎跡を見て、ここまで津波が押し



大川小学校

寄せてくることを誰も想像できなかったのだろうと無念の思い

が残る。

慰霊碑にあった鎮魂の鐘を、遠慮がちに鳴らしてみたら、思いのほか大きな音が響き渡った。

時間は午後5時に近い。牡鹿半島の宿を目指し、暗くなった牡鹿コバルトラインを、突然飛び出してきた鹿に激突しそうになりながら、カーブの連続をひた走る。6時を回った頃小湊浜の「あたご荘」に到着。何人かは車酔いのせいかげっそり・ぐったり状態であった。早速の夕食は、ワタリガニ、アナゴの天ぷら、ホヤの燻製、ドンコの味噌汁、等々食べきれないほどの魚料理で一同大満足。

翌朝は青空と波穏やかな大原湾が眼前に、震災後釣り船などの漁船は一頃より少なくなったとのこと。比較的高台にあるこの「あたご荘」も一階部分は津波に襲われ、漁船などがぶち当たるなどで破損したため改装したとのこと。



8時30分 玄関前で記念撮影後出発。半島中央部の牡鹿コバルトラインから山道に入る。ここからは豪雨による道が崩壊し通行禁止。歩いてほぼ1時間で440mの山頂「大六天山」(一等補点 点名:三国山)に到着(9時40分)。



大六天山・三角点

次いで車は石巻市の日和山(ひよりやま)へと向かった。日和山公園三角点は、大切にしようとして書かれた標識と共に散策路の柵の外側に忘れられたようにあった11時10分。日和山鹿島御児神社の本殿も、甚大な被害により解体とのこと。石巻のシンボルといわれた標高56mのこの山には、彼の震災の時、多くの人が避難し、降りしきる雪の中信じられない光景を目の当たりにしたことだろう。



日和山展望台より

12時20分 塩竈神社到着。昼食は旨い鮎屋で、ということで附近を捜し歩き「鮎のしらはた」に辿り着く。上寿司はもとよりデザートサービス(葡萄が主原料アイスクリーム)が絶品であった。

神社には、七五三のお祝いで、着飾った子供と付き添の親御さんたちが大賑わいである。

まず東参道にある、燈籠を調査した。石の燈籠の台座2段目に漢字の「不」に似た記号が見える。(地理局文書では塩竈村杉坂町一之宮常夜燈臺石) 彫りが浅いうえに摩耗が進み、不鮮明なため指に水をつけなぞってみると、かろうじて「不」の形が現れ撮影ができた。

神社に参拝後、次の水準点(塩竈村塩祠華表新設石標)を目指す。表参道の階段を下りると大きな石の鳥居の右側にあり、保護用の石柱に囲まれ、良く手入れされている。ここの説明版には「高低几号標柱 高低几号は塩の干満の平均値から求められた標高の基準となる零メートル地点を示すものです 明治九年日本地図作成のため東京・塩竈間の水準測定に伴い各所に設置されました この高低几号標柱は独立した石柱として現存する唯一のもので 表参道付近まで入江となっていた当時の塩竈の姿を伝えています」とある。

因みにこの東京・塩竈間の几号について、1994年頃国土地理院の数人が実地調査をしているが、そのメンバーの中に かつて当クラブ会員だった

関義治氏に加わっていた。交通事故でケガをしてリタイアしてしまっただが、もしお元気なら今回の企画に喜んで参加されたのではないと思われる。今回計画の最後は多賀城市市川。陸奥総社宮から西に130メートルほどの地点で自然石に刻まれた珍しいものである。(地理局文書:宮城郡市川邑大久保坂街道北側ノ石)14時30分その隣には立派な案内板がある。



水準点(塩竈村塩祠華表新設石標)



市川邑大久保坂街道北側ノ石

大久保坂街道の反対が、歴史的に名高い多賀城跡である。神亀元年(724年)奈良時代に創建され平安時代まで陸奥の国の政治、軍事の中心地であったが、今は一部道跡など復元されたのみで、約900m四方は一面草原であった。これで二日間の計画完了、出発地の仙台駅へと向かった。駅近くのファミレスで打ち上げ。帰りの電車に合わせ三々五々の解散となった。(文中敬称略)

連載・上信の峠路 ⑨

雁掛峠道 その2

富永 滋

【雁掛沢側の道】

これと言った登山記録が見られないのは、雁掛沢側も同じである。道の付き方を見ると、昭和二十七年までの地形図では、ある程度正しく道の位置が表現されていた。金山から赤岩沢・雁掛沢中間尾根乗越へと小窪を登る部分では、折り返しながら左岸山腹を登る様子が見られ、これは昭和四十年前後の鉱山地図、平成元年の埼玉県森林図とも一致する。特に大縮尺の鉱山地図では、赤岩国有林七六林班内の雁掛沢左岸の標高約1220mの山腹にある赤岩坑の一つの坑口に至る道筋が、正確に示されているので大いに参考になる。

赤岩坑から雁掛峠までは、地形図によると初め水平に進み、沢に追いつかれると沢に絡みつつ峠に達しているようだ。鉱山が最盛期を迎えたのは昭和四十年頃だが、三十七年に金山から雁掛峠を目指した明大隊が残したメ

モ程度の記録によると、彼らが取った道は雁掛沢沿いの道であり、大捷坑前の事務所を通過し、廃液が何かを通す鉄パイプ沿いの道を登り、炭焼小屋の先で道が消え、雁掛峠まではヤブ漕ぎもあったという。やはり当時の道は赤岩坑付近で途切れ、峠へ登る部分は消滅していたようだ。また要領を得ない記述ながら、坑道のトンネルで雁掛沢の山腹に入り、水平道を歩いて沢に出た分隊があったことから、恐らく金山から赤岩坑を経て雁掛沢に至る道があったものと想像される。幾つもの坑道や作業動があったが、いずれも事業に必要な範囲に留まり、当時は既に雁掛峠には達していなかったようだ。

峠道付近で操業していた赤岩坑も昭和四十七年に終掘となり、鉱山道部分も廃道化の一途を辿ったのであろう。

【峠の位置】

峠道は国境超えの部分が消滅したため、峠の位置について疑念が生じている。峠の役割からして1368mの最低

鞍部が峠と考えるのが自然であり、実際そこには小さな石祠が置かれている。付近の上州側はたいてい険しい地形となっているが、鞍部の北側は比較的傾斜が緩いため下りやすく、どう考えてもこの鞍部が峠とみるのが妥当であろう。



地形図においても、最新図(二万五千分の一地形図「両神山」、平成二十七年六月一日発行)を見ると、峠は最低鞍部となっている。至極当然である。しかし実は前版までは、最低鞍部の東方、1400m圏の尾根上に峠が表示されていた。昭和四十八年の初版二万五千図以来の間違ひである。

何故そのようなことが起きたのだろうか。まず大正元年測図の初版の五万分の一地形図を見ると、所ノ沢が雁掛峠に突き上げるようになっていて、地形自体が間違っている。金山からの峠道は金山沢右岸尾根を越えて一旦雁掛沢に下り、再び登り直して雁掛峠を越え、真っ直ぐ所ノ沢を下っている。地形も道も間違ひだらけで、概念図の域を出ていないと言いたくなるほどだ。二万五千図が発行されたとき、埼玉側の道の間違ひ—金山沢右岸尾根を越してからわざわざ雁掛沢に下らず水平に峠に向かう部分—が修正され、また所ノ沢源流の地形間違ひ—雁掛峠でなく大ナゲシ近くの国境稜線に突き上げる—も訂正された。しかし上州側から沢沿いに登ってくるはずの峠道と、峠上で接続できなくなりました。

ここからは推測である。所ノ沢沿いに登ってきた雁掛峠北側の道を、何とか雁掛沢に入るよう歩道の破線を無理に曲げて引き、雁掛沢沿いの道に繋げると、その破線がたまたま1400m圏で国境稜線を通過したので、そこを雁掛峠とした、という仮説が考えられた。当時すでに道が消えていたので、何ら不都合は生じなかったし、わざわざ石祠の位置と食い違うことに関する苦情申立もなかったであろう。単なる机上の空論との誹りがあるかも知れない。しかし実際現地を歩いてみればすぐに分かる。傾斜はどこが急でどこが緩いのか、どの窪が抉れていて危険であるのか、どこを辿ると迷い難く短距離で行けるのか、自ずと答えが見えてくる。最低鞍部から北西に出る微細な小尾根上地形に絡んで1145m付近の本谷に下るのが、地形的には一番妥当と思われた。一帯はシカの食害により裸地化し、その小尾根にも周辺の小尾根や小窪にも、峠道を示唆する踏跡や植生の痕跡は全く認められなかった。地形図破線の通りに所ノ沢沿いに道がついていた可能性についても、峠近くの急峻で崩れやすい沢の地形を見れば、わざわざ遠回りをしてでも沢に沿って行く必要がないことが分かり、間違ひなく峠道は、ある地点で沢を見限り、最低鞍

部へ真っ直ぐ向かっていったと推測される。

地形図破線が当てにならず、道型もないとなると、所ノ沢源流部の具体的な道筋はどのように求めればよいだろうか。群馬県の森林計画図を見ると、峠道は所ノ沢を左右に渡り返したり悪場を巻いたりしながら沢に絡んでつけられているが、1140mで本沢を離れて左岸支窪に入ると、峠までは窪に忠実に詰めあげている。実際の地形に照らすと、わざわざ急で危険な窪を直登するのは甚だ不自然な経路である。測量年は非開示だが、図上で太尾林道が完成し大ナゲシ林道が未着手であることから、平成元年前後と推測され、諸文献から推測される当時の笹の繁茂から、その時点でのベストチョイスと思われる、ヤブを避け窪を直上するルートが採用されたのかも知れない。結局、峠道の位置については、真相はそれこそヤブの中である。

【通行記録—簡易版】

●金山～雁掛峠

[逆行区間のため雁掛峠→金山の説明] 金山とは、地形図にもある字「小倉沢」のことである。第二次大戦前の地図では金山となっていたが、この古い地名は今では「金山志賀坂林道」の名に残るのみである。

雁掛峠の一六六境界標の石柱に立って南の急斜面を見渡すも、道らしき痕跡は全く見られなかった。周囲を探索すると、東に約30mの一五境界標から南に向かって山腹を緩く下る踏跡が見られた。立木に薄い赤スプレーが打ってあるのは、国有林の巡視道で見られるパターンである。7、80m進むと、水の消えた雁掛沢の本谷に出合い、落葉が深く堆積した谷を下った。道型は無く時々痕跡を感じる程度だったが、さほど傾斜が無いので下りやすかった。基本的に左岸の自然林を下った。右岸にはヒノキ植林が現れた。この付近は雁掛沢が国有林とニッチツ社有林を分けていて、時々境界標が埋まっていた。水が少し出ると、左岸が露岩まじりで急になってきたので、右岸のヒノキ植林を下った。

1280m付近で、幾つかの炭焼窯跡を見た。数十年前に明大隊が、水平道を来たあと沢に出合ったところで見た見た炭焼小屋は、恐らくこの辺りにあったのだろう。傾斜がますます緩まり、谷が広がってきた。そのほんの少し下、一七境界標の石柱の直上で峠道は沢を離れるが、道そのものが気配程度でほぼ消えているので、歩きながらその地点の特定するのは難しい。実際には、一帯を歩き回り、山腹に行く峠道の微かな痕跡を発見、逆方向に登って沢へ出会う地点を特定した。

沢に近い部分の峠道は、巨岩・倒木で荒れていたり、斜面の崩れで道が埋まり、慣れた人でやっと見える程度のものになっていた。ほぼ水平に行くうち、道は次第に沢を離れ、道型がなんとか分かる程度になってきた。雁掛沢1160m圏左岸出合支窪を渡るところで、赤岩坑と思われる坑口の一つを見た。ここからは約五十年前まで使われていた鉦山道となるので、岩や地質的に硬く崩れていない部分は歩きやすかった。しかし土砂が流出した場所も多く、その部分では逆に、三十～五十度に傾いた平坦斜面のトラバースとなるのでかなり気を使った。微かな痕跡から、今なお稀に通行者がいることが伺えた。赤岩坑の赤岩国有林(七六林班)内の鉦業用借地は返還されてだいぶ経っていることから、国有林の巡視か、盗掘者の踏跡辺りであろう。

崩壊が散発する崖のような左岸の高みを行く水平道は、六助道と瓜二つであった。表土流入で均された急斜面を、走って通過した。慎重に歩くより応力が大きくなるため、より大きな静摩擦力が得られるからである。道は大部分が土砂に埋まり、辛うじて判別できる程度のものであった。大捷坑の上部を通過する辺りで、突然、割と新しい電柱が現れた。同形式の電柱は大捷坑跡にもあることから、金山から電力を供給していた廃送電施設のものであろう。そこから始まる、大捷坑のある小窪の上部をトラバースする約百米のガレた区間が極めて悪かった。斜度自体は四十五度程度と極端ではないが、木も石もほとんどない捌けたサラサラの土の斜面は、雪面に似て、一度滑り出すと止まり難い。しかも下へ行くほど急傾斜になっていた。安全な通過が可能かどうかは、通行者の技術、土の状態、気象条件の全てが関係する。訪れた日は適度なステップが効き、条件として悪くはなかったが、もう少し気温が低く凍っていたり、水分が多く滑りやすい状態なら、通過できなかったかも知れない。この危険な長いガレを、何とか水平に抜けることができた。

渡り切ったところが境界見出しの石標(恐らく一五三)とプラ境界標の置かれた小尾根で、ガレ手前の電柱に続く一連の電柱が立っていた。すぐ次の小尾根で索道跡を見た。鉱山地図では、ここから大捷坑へ下る道が分かっているが、跡形もなかった。再び電柱の立つ小尾根を過ぎると、すぐ先が金山沢・雁掛沢中間尾根の乗越であった。廃滑車があり、かつて索道が越えていたことが見て取れた。金山沢側は傾斜が多少緩く、鉱山の遺構も多いので、漸く一息つくことができた。

鉱山地図によれば、道は乗越から小倉沢集落に向かって小窪の右岸を折り返しながら下っている。実際、これかと思われる緩い下り道が、左方の山腹へと続いていた。約百米先の小尾根上 1240m圏の地点に、作業基地だったらしい広い敷地があった。大量の施設の残骸に加え、一見浴槽のような何かの槽に水が溜まっていた。ここで鉱山道が不明になり、古テープの辺りを下ると、落葉に埋もれた境界見出標を見るも、はっきりした道は見えなかった。標高差 30mを下ると、今度は水平に細長い作業場跡があった。清水の舞台を思わせる大規模な木製の槽が、まだ崩れず残っていた。ここから南に向かって明瞭に続く水平な道型は、鉱山地図や森林図にも収載された軌道跡であろう。様々な作業道の不完全な痕跡が見られるなか、断片的に残る金山への鉱山道は、それに紛れて判然としなかった。鉱山道は、軌道跡らしい水平道を一時通り、小窪の中央付近で分かれてまた下っているようであった。微かな痕跡から、鉱山図通りに、三度の大きな折返しで標高 1100mまで下る大まかな道筋を捉えることができた。落葉に埋もれた小窪には、所どころ何かの敷地跡が見られた。

薄い道型は、現れては崩壊や倒木で消え、明滅を繰り返した。やがて道は消えそうな細さになって、本谷である赤岩沢(鉱山関係では小倉沢と呼ばれる)へとトラバースしていった。最後は、表土が流失し滑落が危険な斜面を横切り、累々と大礫が積もり伏流化した赤岩沢に下った。

道が完全に消えたので、適当にゴーロ口状を下ると、すぐ大堰堤の上に出た。テープや杭があるので下り口があるかと調べると、左岸の堰堤脇を急下する危なっかしい踏跡があった。堰堤下で車道に出て 100mも行くと、小倉沢集

落最奥の住宅(現在は廃屋)があった。そこは赤岩峠登山口でもある。分かりにくい鉱山町を抜けて県道に出た。

【時間記録】 小倉沢集落(←35分:逆行区間)-雁掛沢左岸尾根乗越(←30分:逆行区間)-雁掛沢に出合う地点(←15分:逆行区間)-雁掛峠 [2019.3.23]

●雁掛峠～930m圏の右岸植林地道入口～大滝ゴルジュ上

峠は南側が明るいカラマツ植林、北は痩せた自然林になっている。平らな部分が続きどこが峠か分かりにくい、小さな石祠が目印である。隣には境界見出標一一六があり、南側は東が国有林、西が日室社有林、北側は全て吉本社有林である。峠道は両方向とも痕跡すら見当たらなかった。

シカ食害で裸地化した、下生えのない平坦な痩せたブナの森を当てどもなく下った。笹が消えて土砂流出が進んでいるのだろう、どの小窪も抉れていて、窪の下降や、窪を渡るトラバースは簡単ではなかった。下りやすい小尾根に絡んで下る、踏跡といえるか分からぬほどの断続的な痕跡を辿った。左の小窪を覗くと水瀑が見えたので、バカ正直に下らなくて正解だった。歩きやすい部分を拾ううち、次第に右の本沢に絡むようになり、やがて 1140m圏二股に降り立った。

ここから緩くなった谷沿いを下った。真っ直ぐに高く伸びたシオジが見事だった。右岸の微かな痕跡が峠道の残骸だろうか。水瓶らしき大きな破片が、遠い昔の生活とそれを支えた峠道を忍ばせた。谷が狭まると、道が消え沢に降ろされた。本谷が滝で入る 1045m圏二股は、本来の右岸道が高巻いて下っているようなのだが、斜面崩壊が酷く使えないので、沢の右岸に絡んで下った。その崩壊を過ぎてからは、傷みが酷いとはいえまだ点々と残骸が残る、右岸の峠道に戻った。不安定な斜面の微妙なトラバースを慎重に続けると、1020m辺りで河原が開けた。すぐまた前方に滝の気配を感じたので、倒木帯に埋もれた箇所先で、右岸道に上がった。

初めての青テープを見たが、まだ道は安定していなかった。恐らく沢の上方斜面の植林地から落ちてきたものであろう。正確に追うのが難しい悪路の断片を拾いながら、970m辺りに架かる二条八米滝を右岸から巻いた。左が氷瀑、右は美しく一筋で流れていた。右岸の泥壁を下って河床まで下ると、965m圏二股だった。巨岩が転がる一帯の先に、ゴルジュらしきが見えたが、よく見ると左岸が空いていて抜けられそう。どこから来たのか、錆びた鉄パイプを水中に見た。峠道はこの辺では水際を進んでいたのだろう。

河原が広がった 950m付近で左岸の植林に青テープが出てきて、続いて右岸も植林帯になった。930mの右岸青テープで、右岸の植林に入る初めての作業道を見た。

巨岩が多く下りにくいゴーロ口状を下ると、大滝ゴルジュの上に来た。両岸とも 50～100mの岩壁で取り付く島がない。この沢の特徴は、植林以外の大部分が、巨岩や大礫、スラブ、裸地なのである。大滝近くの地形は峻険で、下り始めると戻れなくなる危険も無視できない。早々に諦め、帰路を探ることとした。長沢氏が示した、山の神を通る左岸の高巻き道も、痕跡がないどころか、蟻地獄のような斜面は登り難く、ともすれば表土もろとも流され危険である。[時間記録] 雁掛峠(1時間 15分)-930m圏の右岸植林地

道入口-(20分)-大滝ゴルジュ上 [2019.3.2]

●930m圏の右岸植林地道入口～六助道による高巻き～大滝ゴルジュ下

いったん 930m圏の右岸植林地道入口に戻ったが、右岸作業道が途中の荒廃で消滅するのを確認したので、左岸植林に作業道を探した。所々に青テープがあれば、極めて不安定な表土により道自体がほぼ消滅し、植林中が均された裸地状になっていた。グラウンドのように整備された斜面に、ただヒノキを突き刺したような状態であった。搜索すると、尾根の左、すなわち六助ノコル(スミノタオ)に突き上げる所ノ沢の左岸支沢付近の植林に派手に巻かれた青テープが見えた。近くに連れ、多少の踏跡らしきが見えてきた。行ってみると、ヒノキ植林数十本に青いテープが巻かれた様は、壮観だった。

場所は支沢の935m付近であり、仮に大滝上から930m圏の右岸植林地道入口を通らず、左岸支沢に入り直行すれば、十余分ほどの位置である。幹に互い違いにグルグル巻きされたこのポリエチレンテープは、クマ剥ぎ(熊の樹皮剥ぎによる樹木の枯死防止)防止策として林業試験場等が普及を勧めているもので、それを上野村で問題になっているシカの樹皮剥ぎに応用したものようだった。巻いて一、二年の新しいものだから、作業者の通った道があるはずだ、今度こそ、この踏跡を辿れば村へ辿り着けよう期待した。



しかし、そう簡単ではなかった。小流の支沢を渡り、右岸下流方向を探るとすぐ植林が終わって踏跡はに消え、先程大滝上で流されたような蟻地獄状の裸地になった。前方には露岩の並ぶ小尾根が見え、そこまでたどり着いたとして先の保証はなかった。日没までの時間を考えると確実な判断が求められた。先のシカ剥ぎテープの作業者は、恐らく道を通ってきたのではなく、単に車道から尾根か支沢かを適当に下ってきたのだろう。

植林地帯の縁を、ひたすら上に登った。植林地も同様に表土流出が激しく、まともに上には進めなかった。両手をビッケルのように土に差し込み、もしくは倒木や僅かに残った灌木をホールドに、時には全身を地面に接触させ抵抗力を増しながら這い登った。流されても、どこかの植林に引っかかるだろうから、多少の安心感はあったが、体力を激しく消耗した。

無我夢中で登っている時、久しぶりに見る道的なものが、水平に走っているのに気づいた。使えそうだと直感し、車道まで続いているよかと上流側に少し歩いてみると、遥か

上に車道が見えた。続いているにしても相当な登りとなり、時間的に厳しそうだった。だが同時に、記憶にある六助道の光景と似ていることに気づいた。今度は踏跡を逆方向に歩いてみると、確実に覚えのある場所に出た。六助道が、大滝ゴルジュに落ちる山の神の尾根を回り込む地点である。これで現在地が分かった上、今その尾根を越えたことで、大滝を巻き切ったことも確定した。

そこで不安定で断続的なため今ひとつ頼れない六助道を捨て、山の神の尾根の左側を絡んで大滝ゴルジュの下まで降ることにした。下るというより、何もない例の蟻地獄のような斜面を、ザラザラ流れ落ちて行く感じだった。途中で六助道の道筋と交差したことを、後日GPSを見て知るが、砂のような斜面の下りでは全くそれと気づかなかった。地形を見ながら下れば迷うことはなく、あつという間に大滝ゴルジュ下、右岸の大岸壁下に立った。流れの20mほど上にオーバーハング気味のちょっと岩屋的な大テラスがあり、数十米の岩壁下に展開する長さ30mほどのこの場所は、神秘的で曰く有りげである。岩壁の先端部の一段高い位置に小さな洞窟があった。かつて何かは祀られていたとすると納得行すが、なんの痕跡も認められなかった。

ここから野栗沢への下り道は、左岸の約10m上の蟻地獄地帯をトラバースする痕跡がなく、だがそこを抜けると多少踏跡らしくなった。沢まで急下するとすぐ右岸に渡り、岩壁を微妙なスタンスでへつり抜けた。やせ細った丸太が、かつての棧橋の残骸であろう。やがて道らしくなって植林地に入り、ピンクテープが現れた。安心したのも束の間、また道が消えた。沢は緩やかで下ること自体は可能だったが、最近の水害のためだろうか、巨岩が堆積しかなりの苦勞を強いられた。

ゴミが散乱して汚い座禅堂の廃墟で六助道に再び出会い、車道(所ノ沢林道)まで下った。

[時間記録] 930m圏の右岸植林地道入口-(左岸植林地を搜索しながら15分)-六助ノコルに突き上げる左岸支沢の935m付近-(35分)-大滝付近に落ちる山の神の尾根-(15分)-大滝ゴルジュ下-(25分)-座禅堂跡-(10分)-所ノ沢林道終点 [2019.3.2]



AGC レポート vol-67 2019年12月20日発行
 発行: 日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 日本山岳会 気付
 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
 編集担当: 近藤 E-mail: yoshi-kondo@com.home.ne.jp